

高知県 南国市

平成11年度 高知空港発掘調査

# 田村遺跡群

現地説明会資料



2000年2月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

# 田村遺跡群発掘調査

## 1.調査の目的

高知空港拡張整備事業に伴い、拡張計画地内に所在する田村遺跡群について、工事により影響を受ける部分の発掘調査を実施しています。発掘調査は現地調査と遺構・遺物の整理作業を行い、報告書を刊行することにより遺跡の記録保存を目的としています。

田村遺跡群の発掘調査は平成8年度から開始され、平成11年度は4年目の発掘調査となっており、滑走路本体工事にかかる部分についてはほぼ終盤に近づいています。

## 2.田村遺跡群の概要

田村遺跡群は、前回（昭和55～58年度）の高知空港拡張整備事業に伴い発掘調査が行われています。前回の調査以前にも、西見当遺跡など弥生時代の遺跡の調査が行われており、高知平野における弥生時代を代表する遺跡として知られていました。また、空港の北に隣接して、室町時代の土佐国守護代である細川氏の居館とされる田村城館跡（南国市指定史跡）も所在しており、高知平野南部の遺跡の中心地帯です。

遺跡の範囲は、前回の拡張範囲外にも広がっており、極めて広範囲の複合遺跡です。遺跡の立地は物部川の自然堤防上であり、物部川の氾濫にも余り影響を受けることなく、現在まで残された重要な文化遺産です。

## 3.調査対象地

高知県南国市田村（高知空港西拡張区域内）

## 4.調査期間

平成11年5月～平成12年3月（予定）

## 5.調査面積

約25,704㎡

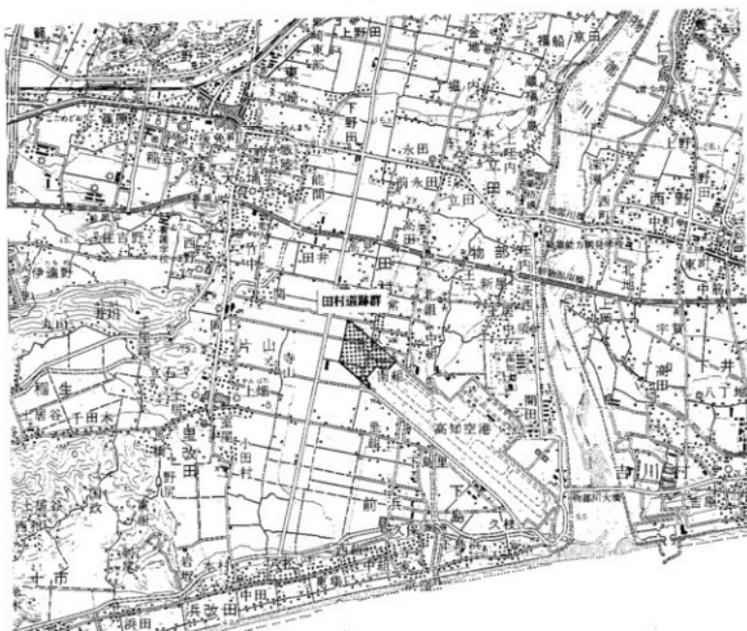
## 6.調査体制

|      |             |             |
|------|-------------|-------------|
| 委託者  | 運輸省 第三港湾建設局 | 高知港湾空港工事事務所 |
| 調査主体 | 高知県教育委員会    |             |
| 調査実施 | 財団法人高知県文化財団 | 埋蔵文化財センター   |

## 7.調査内容

今回の発掘調査の中で、各調査区の遺構の検出状況は以下の表のとおりです。

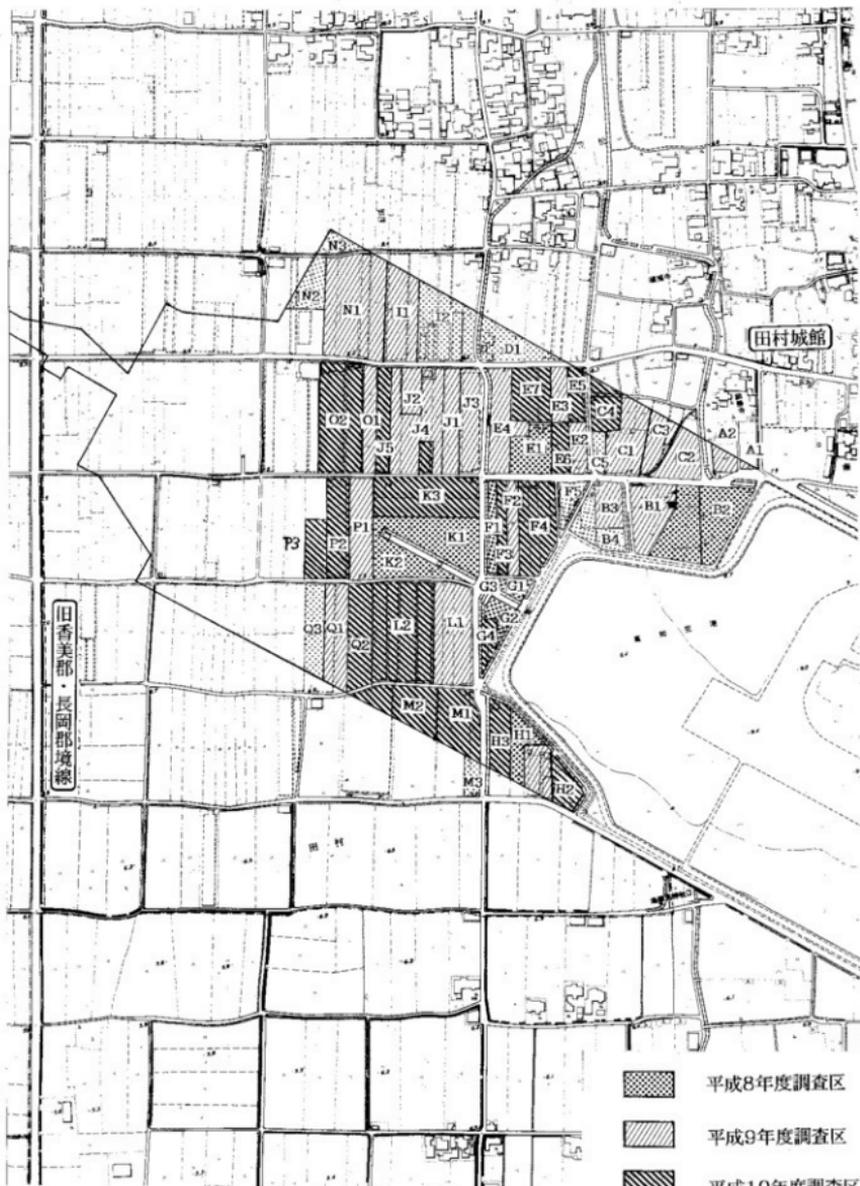
| 調査区  | 時代  | 遺構    |        |    |     |     |    |       |     | 遺物    |
|------|-----|-------|--------|----|-----|-----|----|-------|-----|-------|
|      |     | 竪穴住居跡 | 掘立柱建物跡 | 欄列 | 土坑  | 溝跡  | 流路 | ピット   | その他 | コンテナ数 |
| B 4  | 弥生  | 10    | 6      | 1  | 49  | 10  | 1  | 310   | 3   | 343   |
|      | その他 |       | 11     | 2  | 169 | 16  |    | 310   | 6   |       |
| C 3  | 弥生  | 1     |        |    |     |     | 1  |       |     | 128   |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| C 3北 | 弥生  | 1     |        |    | 27  | 7   | 1  | 80    |     | 10    |
|      | その他 |       |        |    | 11  |     |    | 8     | 2   |       |
| C 4北 | 弥生  |       |        |    | 66  | 2   |    | 260   |     | 37    |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| C 5  | 弥生  |       |        |    | 23  | 3   |    | 200   |     | 56    |
|      | その他 |       |        |    | 6   |     |    | 50    |     |       |
| D 1  | 弥生  | 23    | 1      | 1  | 166 | 7   | 4  | 620   |     | 282   |
|      | その他 |       | 13     |    | 2   | 7   | 3  | 200   |     |       |
| E 6  | 弥生  |       |        |    |     |     |    |       |     | 9     |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| F 5  | 弥生  |       |        |    | 5   | 7   | 1  | 50    |     | 200   |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       | 25  |       |
| H 4  | 弥生  |       |        |    |     |     |    |       |     | 11    |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| I 2  | 弥生  | 20    | 9      |    | 104 | 20  |    | 587   | 4   | 115   |
|      | その他 |       | 3      |    |     | 10  |    | 333   |     |       |
| J4-1 | 弥生  | 4     |        |    | 1   | 1   |    | 4     |     | 10    |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| M 3  | 縄文  |       |        |    | 5   |     |    | 11    |     | 14    |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| N 2  | 弥生  | 2     |        |    | 3   | 6   |    |       |     | 5     |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| N 3  | 弥生  | 1     |        |    | 2   |     |    | 32    |     | 5     |
|      | その他 |       |        |    | 2   | 13  |    |       |     |       |
| O 2  | 弥生  |       |        |    |     | 5   | 2  |       |     | 4     |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| Q 3  | 弥生  |       |        |    |     | 3   |    |       |     | 1     |
|      | その他 |       |        |    |     |     |    |       |     |       |
| 合計   |     | 62    | 43     | 4  | 641 | 117 | 13 | 3,055 | 40  | 1,230 |
| 弥生合計 |     | 62    | 16     | 2  | 446 | 71  | 10 | 2,143 | 7   |       |



田村遺跡群 位置図(S=1/50,000)



物部川 旧河道図



調査区配置図 (S=1/5000)

-  平成8年度調査区
-  平成9年度調査区
-  平成10年度調査区
-  平成11年度調査区

## 8.平成11年度 各調査区の概要

本年度の調査概要は、各調査区ごとに以下に順番に述べています。

### N区

N区は、今次調査区の北西端部にあたります。N2区では、I区から続く弥生時代の溝6条と竪穴式住居跡が見つかりました。竪穴式住居跡は直径5mほどの円形のもの、攪乱によって西側が壊されている一辺3mほどの隅丸方形のものと2棟見つかりました。その他にはピットや小さな土坑が数基見つかっただけであることから、集落の北西端部にあたると思われます。

N2区の北側に隣接するN3区では調査区の東西方向に走る溝が11条見つかりました。ほとんどが古代の遺構と思われます。この溝を南北方向で切る溝が3条ありますが、非常に浅いうえに遺物が何もないのでくわしい時代は不明です。調査区北部では南北4m、東西5mの方形の竪穴式住居跡が1棟見つかっています。この遺構も埋土の様子から古墳時代以降のものと思われます。



古代の溝跡

### O区

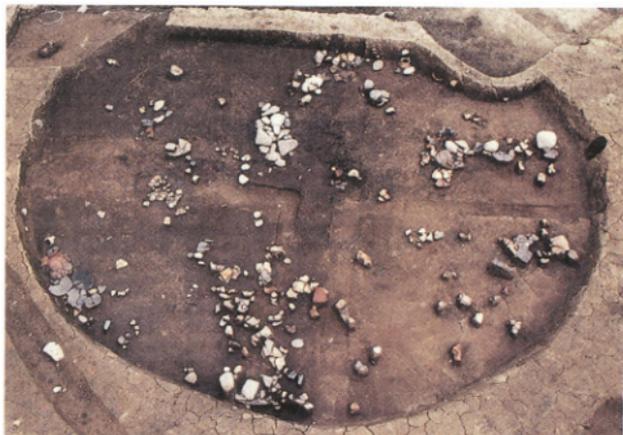
今次調査区の西端部であるO2区では、東隣から続く溝が検出されました。この溝は、幅約2m、深さ約1mの規模で北東方向から続いており、遺物の出土状況や埋没状況から、弥生時代後半半ばまでに流れのある洪水によって周辺の比較的高い地山礫層が削られ、その礫によって埋没したと考えられています。また、調査区西端では、それまで断面U字状で深さも約1m程あったものが、断面形が箱形になり、深さも約0.3m程度と浅くなってきています。地形的にみれば南西部の標高が低くなっていることから、本調査区以西の部分に水田域があった可能性があり、水田に向かって自然に流れ込んでいた可能性が考えられます。



南西方向にのびる弥生時代の溝(〇区)

## J区

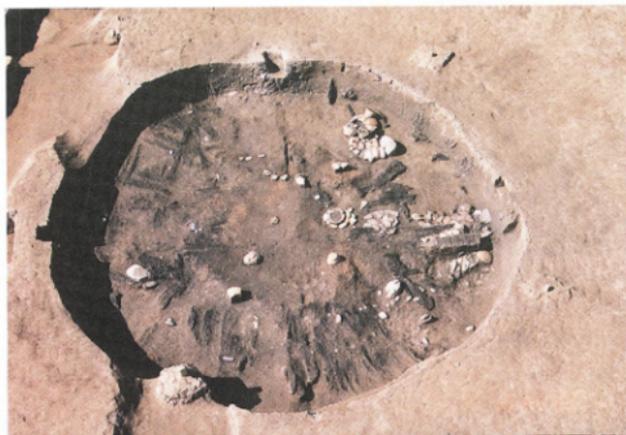
J区の北部にあたるJ4-1区は、I区の南に位置し、わずか70㎡ほどの調査区ですが、住居跡が密集する様に4棟確認されています。中央部で確認された1棟のみが完全な状態で、残りのものは、前回調査で1部が確認されていた状態でしたが、遺構密度の高さは注目されます。また、住居跡からは遺物も比較的良好な状態で出土しており、特に、鉄鏝<sup>てつてく</sup>が出土したことは注目されます。土器は中期末の凹線文土器<sup>おうせんもんどき</sup>と言われるものであり、瀬戸内地域で出土するものと非常によく似た特徴を持っています。



弥生時代中期終わり頃の竪穴住居跡

## I 区

I2区は、平成9年度に発掘調査を実施したI1区の東隣りに位置しており、弥生時代中期の集落の北の外れと思われます。中央部には遺構が少なく、周辺部において遺構が集中しており、現段階では、竪穴住居跡20棟、掘立柱建物跡12棟を検出しています。また、調査区の北側には、I1区から続く大溝が東西に走っており、調査区の南側にもO・J区から続く弥生時代に掘り込まれた溝を検出しています。調査区南側の大溝の上面と北東部北岸には、古代に敷き詰められたと思われる石が定期的に並べられていました。



S T 203

焼け落ちた  
弥生時代の住居跡



S T 212・214

I2区で特徴的な竪穴住居跡は S T 203・S T 212・S T 214です。これら3つの住居は、いずれも焼失住居で、特に S T 203は弥生時代中期後半の壺が5個ほど残っていたことから、意図的に焼き払ったのではなく、何らかの原因で火事がおき、焼け出されたのではないかと考えられます。3つの住居の形態的特徴は、S T 203が直径5～6mの円形の住居で、S T

212は1辺が4mの方形の住居でST214を切って新しく建てられています。ST214は直径約10mの円形の大型住居でこの地区の有力者の住居と思われます。ST212とST214は弥生時代中期後半の間に建てられており、遺構の切り合いからみて円形住居から方形住居へ変遷していくものと思われます。



弥生時代の  
掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、現段階で12棟確認されていますが、3棟が古代のものと思われ、残り9棟が弥生時代中期のものと思われます。弥生時代のものは、舟底形の溝状土坑が付随しているタイプのもがありますが、溝状土坑の中には土器が大量に投げ込まれており、なにか特別な建物であることが想定できます。



溝の上の  
集石遺構

調査区南部の大溝上面の集石遺構は、出土遺物（須恵器）から判断して、9世紀ごろのものと思われます。弥生時代の溝の上に人工的に並べられています。大溝そのものの用途は、I1区から続く調査区北側の大溝と同じく水利施設と思われます。また、調査区南部の大溝の北東部北岸には、波板状の遺構が掘り込まれており、凹面に砂利が敷かれています。古代の道の舗装工事の跡ではないかと思われます。確認されている広さは、北東から南西にかけて14m、北西から南東にかけて9mです。

## D区

D1区では弥生時代前期、弥生時代中期末から後期初頭、そして古代の遺構が検出されました。古代の遺構は調査区ほぼ全域に検出されていますが、弥生時代の遺構は調査区中央部の大きな流路をはさんで東側が前期の遺構、西側が中期末から後期初頭の遺構にほぼ分かれています。

弥生時代前期の遺構としては南側のC区から続く環濠とその内側にあたる土坑が約50基検出されました。ほとんどが弥生時代前期中葉の西見当Ⅱ式土器にしけんとうの遺構ですが、弥生時代前期の終わりに使われていた大篠式土器おほしのしきどきがまとまって捨てられていた土坑が1基あります。

出土遺物は、弥生時代では大変珍しい人面動物型土製品が見つかりました。また、縄文時代前期の玦状耳飾けつじょうみみかざりも見つかっています。

弥生時代前期終わり頃の  
土坑(大篠式土器)



縄文時代前期の  
玦状耳飾

弥生時代中期の終わりから後期初頭の遺構は竪穴住居跡が23棟見つかりました。直径7～8mの大型のものと4～6mの小型のものもみられます。大型のものは3～4棟切り合っており、建て替えが行われたことを示しています。また、埋土から多量の炭化米たんかまいが見つかった住居がありました。焼土と一緒に埋まっていたことから捨てられたものと思われる。



弥生時代の切り合った住居

古代の遺構では、掘立柱建物と溝、流路が見つかりました。掘立柱建物のなかにはコの字型に配置されたものがあり、東側に2間×4間、西側に3間×5間、北側のものは切り合いが多くはつきりしませんが2間×3間以上と思われる建物が配され、南側に開く「コ」の字型の配置をしています。柱穴は方形で一辺80cm～1mと他のものより大きく、F4区で見つかった配置や規模とよく似ています。これらの建物群は南側のF4区で見つかった古代の建物群からほぼ一町離れていることから、当時の地割の様子がうかがえます。



古代の掘立柱建物跡

## C区

C区の北部（C4区）は、弥生前期の環濠集落の内側の集落の中央部付近と推定され、昨年行われた隣接する調査区の調査結果の状況では、遺構の残存状況が良好なことから、現在まで検出されていない住居跡の検出が期待されていました。しかし、今回の調査でも住居跡は確認されず、土坑、ピットのみが確認されています。土坑は、約70基と集中した状態で検出されており、時期は、そのほとんどが弥生時代前期の環濠集落の時期と考えられます。

### 弥生時代前期の土坑(写真:SK4149)

SK4149は、隅丸の長方形でやや下膨れ断面形の土坑です。埋土中からは大型の遠賀川式土器の壺を含む、土器が多量に出土した他、石器も頁岩製の石鎌、鎗のしっかりした磨製石鏃などの弥生前期の特徴を持つものが出土し、弥生時代前期の持ち物を知るうえで貴重なものとなっています。また、この土坑からは炭化物や焼土が出土し、細かな骨片と見られるものも出土しており、土坑の性格も注目されます。



C区の東部（C3区）では、98年度に調査が行われ、調査区中央部に大きな流路が存在していることがわかりました。この流路は、弥生時代前期には水の流れがあったと考えられ環濠集落の東限を区切るものと考えられます。弥生時代の中期末頃にはすでに埋まって陸地化しており、当時の弥生人が住居を営んでいたことが前回の調査で確認されています。今回の調査では流路全体の調査には至りませんでしたが、新たな事実がいくつか確認されています。その一つは、流路は北部でやや東側に蛇行するため、調査区北部ではしっかりした地盤部分が北側では残っています。この部分は、弥生時代前期の環濠集落の東端部にあたり、内濠から北に延びる支流と考えられる溝と環濠内を東西に横切る溝が合流してさらに北側に延びる溝が確認されました。これは、前期の集落が溝によって集落を区切ると言う明確な意志を持っていたことをうかがわせています。

また、調査区の東側では、中世と考えられる溝が存在する事が確認されています。この溝の延長は今回の調査では確認できませんでしたが、断面確認では幅約2m、深さ約1mが残存しており、隣接する田村城館との関係が考えられ、興味深い資料となりました。

C5区は弥生時代前期の環濠集落の内側にあたります。調査区の南端で外側の環濠、北端で内側の環濠が見つかりました。内濠と外濠の間では土坑が約40基とともに、弥生時代前期ごろの西見当式にしげんとうしきの土器が見つっています。

また、外濠からは魚を捕るときに網に使われていた土製の重りが38個まともに見つかりました。網に付いたまま捨てられていたようですが、残念ながら網や浮きは残っていませんでした。



弥生時代前期  
の内濠ないごうの断面

内濠から出土した  
弥生時代前期の土器



外濠がいごうから出土した土鍾どすい  
(網に付ける土製の重り)

## B区

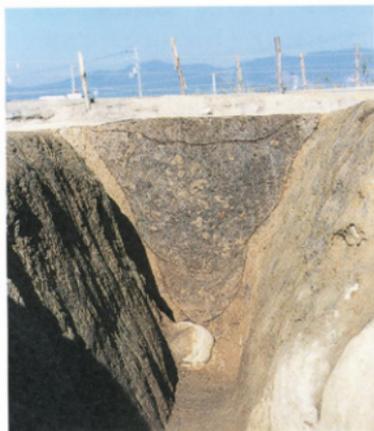
今回調査を行った調査区（B4区）はC区の南部にあたります。上面は、近世から現代にかけての家の跡などにより攪乱が著しく削平を受けてる箇所がほとんどでしたが、下面では弥生時代前期の遺構など貴重な発見がありました。C区から南に流れる弥生時代の川の続きを検出しました。B1区の調査では川の東側肩部しか検出されていなかったため川の全容は把握できませんでしたが、今回の調査で西側肩部が検出され、川幅は約20m、深さは1.5～2m前後を測ることがわかりました。川の肩口（西側）には一段低い所がテラス状になっており、弥生時代前期末（おおしのしき大篠式）から中期の初めの土器（たむらしき田村式）が集中して出土しています。これら前期末から中期初にかけての土器の出土は今回検出されている川の西側肩部にいくつかのブロックに分かれ多くみられます。中には壺の胴部、底部に穴を開けたものや、壺の頸部を打ち壊したものなど形を変えた土器があり、儀礼的行為に使われた可能性が考えられます。



弥生時代の川跡

## 弥生時代前期の環濠

弥生時代前期環濠を検出しました。この溝は、今までの調査で確認されている弥生時代前期の内濠、外濠2重の環濠の外側にほぼ同じラインで掘られており、コーナー部はV字状になっています。東側は流路につながり、西は弥生時代中期～後期の溝によって切られています。この環濠は幅80cm、深さ50cmを測り、上面は周辺の遺構の検出状況から後世の削平を受けているものと思われます。埋もれている土の状況は、人為的に埋められており、土の中から、壺、高坏などが出土しています。これらの土器は2重の環濠の時期よりも少し前の時代のもと考えられており、集落の構造を考える上で非常に貴重な発見になりました。



弥生時代中期から後期にかけての主な遺構として窪穴住居9棟検出しています。ST409の中央ピットからガラス製<sup>まがたま</sup>勾玉が出土しました。残念ながら頭の部分が欠損しており完形ではありませんでしたが、本県では本村遺跡（野市町）につく2例目の出土であり、ガラス製品の需要を考える上で非常に貴重な資料です。その他、D・E区、そして現在、調査中のF5区を流れる溝の続きを検出しています。弥生時代中期中葉から後期にかけての遺物が多量に出土しており、溝として機能していた時期、集落にとってどういう風に機能していた溝か考える上で重要な発見です。



ST409出土のガラス製勾玉

## M区

M区は南部の調査区であり、いままでの調査で縄文時代の遺物がブロック状に集中している場所であることが判っています。M3区は昨年調査したM1区の南側にあたり、道路を挟んで東隣にはこれまでの調査で縄文時代の遺物がまとまって出土したH3区があります。調査区は南に向かって低くなっており、東のH区側に落ち込むようになっています。

今回の調査では、調査区の南東部分から縄文土器が石器と共にブロック状にまとまって出土しました。出土した土器は北部九州で流行していた鐘崎式土器<sup>かねがさきしきどき</sup>と呼ばれるもので縄文時代後期中葉（今から約3500年前）のものと考えられます。石器の方も石鏃<sup>せきぞく</sup>、尖頭器<sup>せんとうき</sup>（槍先）、摺石<sup>すりいし</sup>、叩石<sup>たたきいし</sup>、打製石斧<sup>うちせいせききょ</sup>、磨製石斧<sup>まげせいせききょ</sup>、石錘<sup>せきすい</sup>（石のおもり）など、種類も豊富です。M3区の調査では、打製石斧と石錘がほぼ同じ点数で出土しました。昨年調査されたH区では石錘の出土量が多かった事と比べると縄文時代に田村で住んでいた人々の生業を考える上で興味深い調査例となりました。



縄文時代後期  
かねがさきしきどき  
の鐘崎式土器

## 9 まとめ

高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群の発掘調査も平成8年度に開始されてから、平成11年度をもってほぼ終了となりました。現在の調査面積は約15万㎡であり、広大な面積の発掘調査を行ったこととなります。高知県内では前回の拡張に伴う調査以来の大規模な調査です。前回調査では弥生時代とともに中世を中心とする調査内容でしたが、今回はそのほとんどが弥生時代であり、一部古代の重要な遺構も検出されました。調査内容については、今までも年度ごとに発表してきましたが、弥生時代では前期から後期までの多量の遺構、遺物が発見され、田村遺跡群の集落構造と展開を知るうえで非常に貴重な資料として、全国的にも注目をあびてきました。今回の説明会ではこれまでの調査内容も含め、全体のまとめとして、現在の状況を説明します。

先に述べたように、今回の調査では弥生時代前期から後期の集落跡の全容を窺うことのできる資料となっています。時期的には前期の環濠集落と中期後半～後期初頭の集落到大きく二分されます。

### 弥生時代前期

前回調査では弥生時代前期初頭の集落が調査され、これに続く集落として北へ移動した環濠集落が確認されていました。今回はこの環濠集落の南半部の調査を行ったこととなります。前回確認された時点では環濠は1重でしたが、今回の調査により外濠の存在が確認され、2重の環濠であったことが判明しました。また、さらに南側に環濠の残存ではないかと思われる溝が検出されましたので、部分的には3重の環濠であった可能性も考えられます。全体の形状は、東側に幅10m程の流路が流れており、この流路に対し西側へ半月形を描くように環濠が掘られています。環濠の範囲は東西130m、南北220mであり、その面積は約24,000㎡ほどとなります。環濠の内外には多数の土坑が検出されていますが、竪穴住居跡は環濠の外側に数棟が検出されるのみであり、現在のところ環濠は集落を囲むものではないようです。土坑や環濠からは大型壺や壺、甕などが多量に出土しており、石器も磨製石鏃、石斧、石鎌、石包丁などとともに未製品も多く見られ、石器製造が盛んに行われていたようです。

### 弥生時代中期から後期

前期後半には環濠集落は廃絶し、集落は調査地の北へ移動しているようです。前回の拡張時の周辺調査では現地から北側300mの範囲に竪穴住居跡などが検出されており、今次調査

| 調査年度 | 竪穴住居跡 | 掘立柱建物跡 | 土坑    | 溝   | 流路 | 棚列 | ピット    | その他 | 遺物    | 調査面積    |
|------|-------|--------|-------|-----|----|----|--------|-----|-------|---------|
| 8年度  | 69    | 9      | 337   | 50  | 2  | 0  | 4,432  | 2   | 400   | 19,755  |
| 9年度  | 120   | 43     | 642   | 94  | 11 | 1  | 4,100  | 5   | 1,386 | 46,959  |
| 10年度 | 142   | 116    | 833   | 151 | 23 | 3  | 4,160  | 1   | 1,214 | 51,353  |
| 11年度 | 62    | 16     | 446   | 71  | 10 | 2  | 2,143  | 7   | 1,230 | 25,704  |
| 小計   | 393   | 184    | 2,258 | 366 | 46 | 6  | 14,835 | 15  | 4,230 | 143,771 |
| 前回調査 | 60    | 14     |       |     |    |    |        |     |       |         |
| 合計   | 453   | 198    | 2,258 | 366 | 46 | 6  | 14,835 | 15  | 4,230 | 143,771 |

でも北から流れてくる溝や流路に前期末～中期前半の遺物が多量に出土していることから、北側に移動していることが分かります。

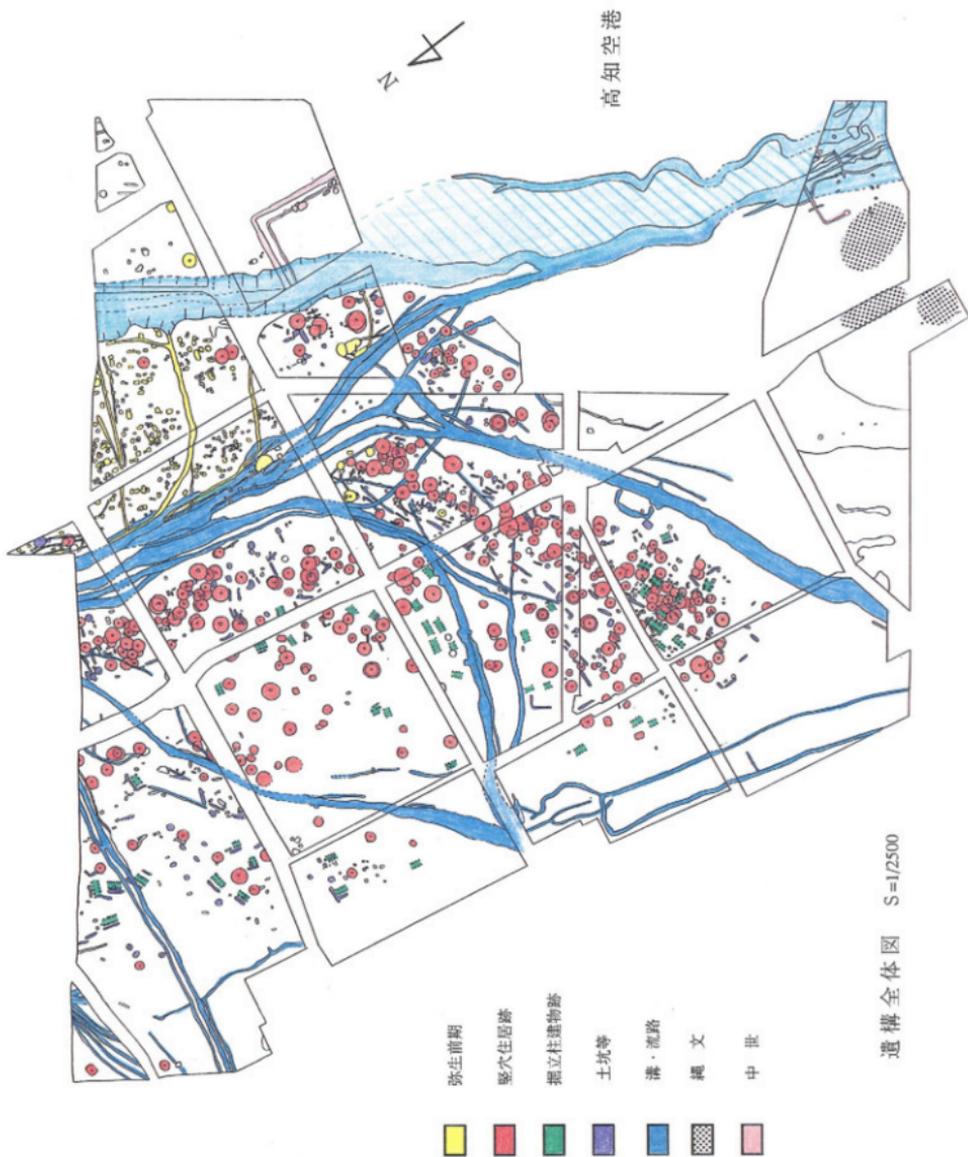
中期後半になると集落は再び南へ異動しており、調査区内に数多くの竪穴住居跡や土坑が発見されています。前期環濠の西側に新たに数状の溝が掘られ、北東から南西方向に緩やかに弧を描くように流れています。この中の1本の溝は大きくカーブして集落内を区切っています。竪穴住居跡は溝に沿って弧状に検出されており、掘立柱建物跡や土坑も竪穴住居跡の密集部分にやはり多く検出されています。全体的に見ると、中央部では竪穴住居跡が少なく、広場的な空間ではないかと考えられます。竪穴住居跡は今回の調査で約400棟が発見され、前回調査分を含めると約450棟となっており、四国でも最大の集落であったと言えます。検出状態では5～6棟の竪穴住居跡が重なりあっているものも見られ、多くの竪穴住居跡が数棟の切り合い関係を持っています。このことは、住居を建てるにあたって場所を移動せずに、同じ所に何度も建て替えをした結果であり、弥生中期後半から後期初頭の時期には集中して居住していたことが分かります。

竪穴住居跡の大きさは、直径8m以上の大型と直径5～6mの中型、直径4m以下の小型の3種類が存在していますが、その形態は大型と中型ではすべて円形であり、小型の竪穴では円形以外に方形のものが存在しています。大型の住居跡を見てみると同心円状に拡大した例が多く見られ、最初は中型であったものが居住する人数の増加等に伴い拡大していったと考えられます。また竪穴住居跡の分布を見ていくと、大型の住居跡を中心に中型の住居跡数棟とその周辺に小型の住居跡が付随するパターンが見られ、集落内の5～6ヶ所の大型住居跡を中心とするブロックが存在しています。大型の住居跡からは、他の住居跡に比べガラス小玉や鉄製品などが出土する例が多く見られることから、集落内の有力者の住居と考えられ、数人の有力者によって田村の集落は統率されていたと思われる。

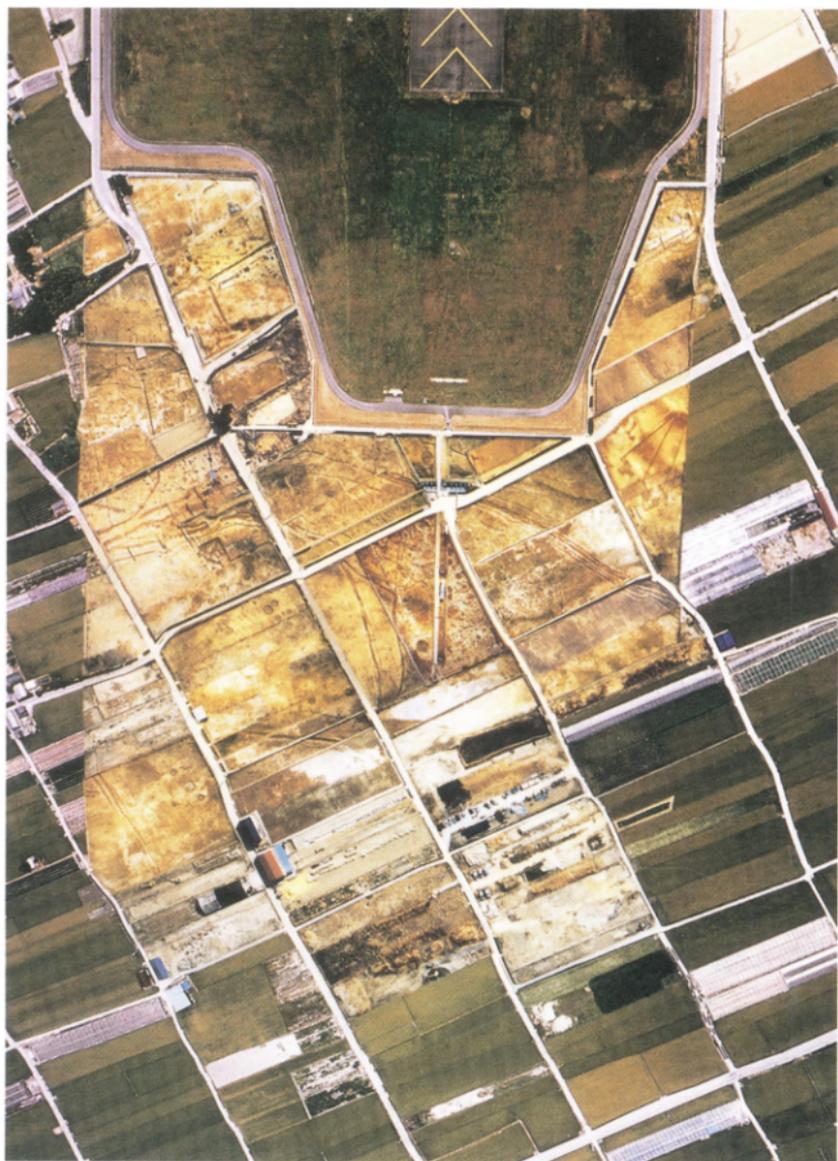
掘立柱建物跡は約200棟が現在確認されていますが、最終的にはやはり400棟近くの数になると考えられます。掘立柱建物跡の分布を見ると、北部と南部に多く見られ、特に南端部では、1×2間の柱穴の大きな掘立柱建物跡が2棟並行して発見されており、特殊な機能を持つ建物として捉えることができます。また、北部の掘立柱建物跡では溝状の土坑が建物に附属する例が多く、これも通常の建物以外の用途が考えられます。

今回の調査で注目される遺物としては、県内初出土の掘立柱建物を描いた壺と人面動物形土製品をあげることができます。壺に描かれた掘立柱建物は、壁の無い高床建物を表しており、屋根の表現などから飾られた建物であったと考えられます。また、人面を持つ土製品は土坑から出土していますが、体は動物と考えられるので、やはり特異な祭祀などに使われたものと思われます。

以上のように4年間に渡る調査により、田村遺跡群の内容が判明してきましたが、やはり四国でも最大の弥生時代の拠点集落であり、弥生集落の発展を考える上で極めて重要な遺跡であることが確認されました。さらに、今後の整理作業により詳細な田村遺跡群の内容が判明することになり、その成果が期待されます。



遺構全体図 S=1/2500



平成8・9・10年度 全体航空写真



D1区 調査区全体写真



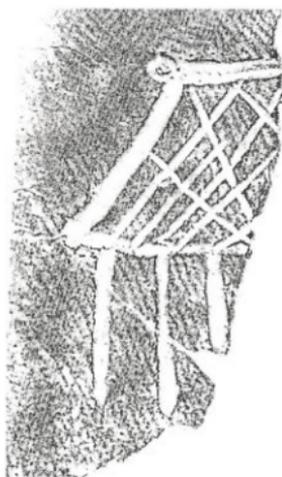
I2区 調査区全体写真



掘立柱建物絵画土器



人面動物形土製品



掘立柱建物絵画土器 拓本